

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所
162-0805 東京都新宿区矢来町65
電話 03(5228)3171 FAX 03(5228)3175
発行者 総主事 司祭 三鍋 裕

新しいときのはじまりを目前に

管区事務所総主事 司祭 ローレンス 三鍋 裕

お互いに忙しい1年でした。いろいろな会議や行事がありました。南アフリカでのTEAM CONFERENCEでは平和、貧困、環境について話し合われました。沖縄の旅、比叡山の宗教者平和サミット20周年、広島での平和祈念行事、ハンセン病療養所菊池黎明園での人権セミナーなど、暑い中での祈りと学びでした。秋になりましてから聖公会世界平和会議が韓国で開かれ、北朝鮮の金剛山訪問もありました。9条アジア宗教者会議も開催されました。参加できる人数は限られてしまいますので、どのように皆さんと分かち合えるかが課題となります。どれも現実の世界の問題ですから、政治と無関係とは言えません。課題にもよりますが、教会の信仰の観点から声を上げなければならないこともあります。しかし一部の人々の思いにとどまっただけでは大きな力になりません。そのためには丁寧な分かち合いと、お互いの理解が大切になりましょう。

私たちは聖餐式の代祷の中で、正義と平和のため、貧しい人、病気の人その他災いの中にある人々のためにお祈りしているのですから、やはり世界中の人々のことを心にとどめ、私たちに何かできることはないだろうかという心を持ち続けたいと思うのです。家族や親しい友人が痛み苦しんでいるときには、祈り、手を差し伸べようとします。家族や親しい友人のように身近な存在ではなくても、現実には戦乱の中で傷つき、貧困に悩み、病気で苦しんでいる人々がいることを忘れたくないのです。

9条アジア宗教者会議の場で、沖縄の平良夏芽牧師のメッセージがありました。「私はテロを支持もしないし容認もしません。しかし自分の命を犠牲にしてテロに走る人々の背景に何かあるのかをも問いたい。彼らをテロに追いやるものは何かをも問いたい」。力の強いものが、弱いものを圧迫し続けていることを指しての言葉として聞きました。

好い年をしてわずかに3泊のニューヨークでの休暇を過ごしました。疲れて後悔するのを承知の上でも、時として日常生活から離れたという誘惑に勝てなかったのです。晩秋のセントラルパークを散歩するつもりで出かけましたが、ニューヨークは

会議・プログラム等予定

(前回報告以降追加
および12月25日以降)

- 12月
5日(水)神学教理委員会(中止)
16日(日)青年委員会(中部教区センター)
- 2008年1月
8日(火)正義と平和・憲法プロジェクト
9日(水)主事会議
13日(日)~14日(月)青年担当者会(牛込聖バルナバ教会)
14日(月)青年委員会
21日(月)教区制改革委員会
21日(月)ウィリアムズ主教記念基金委員会(立教大学)
28日(月)~29日(火)文書保管委員会
28日(月)正義と平和委員会(13時)宣教協議会企画プロジェクト(19時)
29日(火)正義と平和担当者会(東京・牛込聖バルナバ教会)
- 2月
1日(金)聖公会/ローマカトリック教会「共に捧げる祈りの集い」(東京カテドラル)
5日(火)祈祷書等検査委員会
7日(木)広報主査会
12日(火)主事会議
12日(火)~14日(火)管区共通聖職試験
14日(木)礼拝委員会
14日(木)人権担当者会
14日(木)常議員会
20日(水)年金の将来を検討する特別委員会
22日(金)渉外主査会
25日(月)~26日(火)文書保管委員会翻訳打合せ会
26日(火)~28日(木)主教会(神愛修女会聖ステパノ館ほか)
- <関係諸団体会議等>
- 12月
28日(金)聖公会生野センター理事会
*管区事務所冬期休業
12月31日(月)~1月4日(金)の間冬期休業いたします。1月の業務は7日(月)からです。よろしくお願いたします。

晩秋どころか大雪でした。グラウンド・ゼロと呼ばれている9.11テロで破壊された世界貿易センタービルの跡地に立ってみました。テロの犠牲者のことを想いました。そしてテロに走らせた背景を想像してみました。簡単にはわかりませんが、武力による報復は別な戦いを生むだけのようにしか思えません。アメリカの教会では、戦地の米軍将兵のために祈っています。複雑です。でも、あきらめたくはないのです。

さらに欲張って、夏の沖縄の旅では受け止めきれなかった沖縄を思ってみたくて、沖縄に出かけました。問題になっている辺野古の海をもう一度眺めてみました。辺野古の基地計画撤回も普天間基地の移転も簡単に実現するとは思いません。ヘリポートというけれど、広大な普天間飛行場を海上に移転しようというのですから。しかし辺野古の海は、戦いのための基地にするにはあまりにも平和で美しい海でした。

今回は愛楽園もお訪ねしました。本当に美しいこの海辺にも私たちが知らなかった、人々の悲しみが隠されています。かつては沖縄からは「大和」と呼ばれていた本土でさえ極めて不十分な医療福祉制度と強い偏見の時代に、沖縄のハンセン病患者には手は差し伸べられませんでした。自らも患者であった青木恵哉師が医療伝道に遣わされ、飲み水さえ不自由する土地で追われ追われながら住む場所と医療を受ける権

利の確立に務められたことを思い、困難を乗り越える信仰を思い知らされました。病める人の苦しみを想像する力がなかったのか、あるいは気がつかない振りをしていたのか、拒絶し続けた事実について、今の私たちは違うのだと言えるでしょうか。ちょっと想像力を働かせれば気がつくはずの諸々も争い、痛み、貧しさ、悲しさにもう少し心を寄せたいと思うのです。

私たちにできるでしょうか。しかし、御恵みによって私たちが新しい存在に創られることを信じているのです。創造の主が私たちを新たにソウゾウカに富んだ存在に創り変えてくださいますように。昼の祈りでは「見よ、古いものは過ぎ去った、すべては新しく造られたのである。しかし、すべてこれらのことは神から出ている。神はキリストによって、わたしたちをご自分に和解させ、かつ和解の務めをわたしたちに授けてくださった」ことを確認します。クリスマスの聖餐式では「再び生まれ、神の子とされたわたしたちを、常に聖霊によって新しくしてください」と祈ります。このクリスマスが私たちを全く新しいものとし、すべての人々と共に、今まで回復することができなかった真の喜びと平和に満たされた私たちに変わられますようにとご一緒に祈りたいと願います。主のご降誕による新しい私たちの誕生と、神様の新しいときの始まりのゆえに、「おめでとうございます」とお祝い申し上げます。

常議員会

第56(定期)総会后第6回 11月28日(水)

1. 2007年度管区一般会計収支予算承認の件(責任役員会決議)承認
2. 2008年度管区一般会計補正予算案見送りの件(責任役員会決議)承認
3. 宗教法人「日本聖公会北関東教区」規則一部変更の件(責任役員会決議)承認
4. 宗教法人「日本聖公会京都教区」規則一部変更の件(責任役員会決議)承認
5. 宗教法人「日本聖公会大阪教区」規則一部変更の件(責任役員会決議)承認

6. 大斎克己献金国内伝道強化プロジェクト選定の件: 外国人労働者支援プロジェクト(中部教区)、聖公会生野センター活動充実のための移転計画(大阪教区)の2件について審議。主事会議に委ね、首座主教の決裁を得て決定する。

7. 米国聖公会UTO支援金申請の件

8. 2007年大斎克己献金国内伝道強化プロジェクト応援金送金の件

次回以降の常議員会

2月14日(木)、4月16日(水)

主事会議

第56(定期)総会期第15回 12月10日(月)

主な協議事項

1. 大斎克己献金「国内伝道強化プロジェクト」応援対象選定について
「聖公会生野センターの活動充実のための移転計画」(大阪教区)に決定
2. 2008年大斎克己献金「海外教会宣教協力費」用途について
次回協議事項とした。
3. 災害救援募金等の送金について
以下の送金を決定:(1)ペルー地震被災者支援のため (2)パキスタン地震のため (3)フィリピン台風被災者支援のため

次回以降の会議

1月9日(水) 2月12日(火)

各教区

大阪

- ・第98(臨時)教区会 2008年1月27日(日) 14時 大阪教区主教座聖堂(川口基督教会)教区主教選挙のため

2007年教区会選出常置委員

北海道	聖職	大町信也	大友正幸(長)	藤井八郎
	信徒	沖田紀夫	遠藤淳治	石塚正史
東北	聖職	八戸 功(長)	中山 茂	越山健蔵
	信徒	小貫晃義	三宅 哲	長井 淳
北関東	聖職	斎藤英樹(長)	小野寺 達	輿石 勇
	信徒	谷川 誠	横川 浩	菊池邦杵
東京	聖職	大畑喜道(長)	山口千壽	笹森田鶴
	信徒	松田正人	山田益男	小林幸子
横浜	聖職	相澤牧人(長)	三原一男	前田 浩
	信徒	中林三平	宮崎道忠	佐藤尚敏
中部	聖職	渋澤一郎(長)	市原信太郎	土井宏純
	信徒	清 公一	徳山義章	塚田一宣
京都	聖職	宮嶋 眞	三浦恒久(長)	黒田 裕
	信徒	佐々木靖子	松本嘉一	三木清樹
大阪	聖職	福田光宏(長)	岩城 聡	奥 康功
	信徒	佐野信三	畑野めぐみ	槻本邦夫
神戸	聖職	芳我秀一(長)	小南 晃	上原信幸
	信徒	大東康人	橋口 満	松田嘉彦
九州	聖職	濱生正直(長)	堀尾憲孝	小林史明
	信徒	東 美香子	片岡慎一郎	蔵元英一
沖縄	聖職	上原榮正(長)	高良孝太郎	戸塚鉄也
	信徒	大倉信彦	知花阿佐子	宮城正子

† 逝去者 靈魂のパラダイスにおける光明と平安を祈ります。

ヨハネ足立省一郎(元ウィリアムズ主教記念基金基金委員会委員)2007年11月14日逝去(77歳)

ヨセフ八木一幸(神戸教区総会信徒代議員)2007年12月13日逝去(81歳)

📖 出版物案内

- ・点字版『みことばの礼拝』
岐阜アソシア作成 価格 1部 600円
ただし、ご利用者本人がご購入の場合は1部 160円(墨字版と同額)です。
礼拝用書の点字版を各教会に備え付けてくださるようお願いいたします。

お申し込みは管区事務所へ

『み言葉の礼拝』訂正箇所について

『み言葉の礼拝』2006年11月26日発行の第1刷に以下の誤りがありました。第1刷をお持ちの方は、お手数ですが訂正してご使用ください。

式文4ページ、マリアの賛歌 1行目
(誤) わたしの霊は救い主なる神を
(正) わたしの霊は救い主である神を

《人 事》

北海道

司祭 ミカエル広谷 和文	2008年3月31日付	釧路聖パウロ教会及び厚岸聖オーガスチン教会牧師の任を解く。
	2008年4月1日付	学校法人聖公会神学院に校長として出向を命ずる。(任期:1期4年)

東北

主教 ヨハネ加藤博道	2007年12月20日付	秋田聖救主教会管理牧師に任命する。 能代キリスト教会管理牧師に任命する。
司祭 ヤコブ八戸 功	2007年12月20日付	秋田聖救主教会協働を命じる。
司祭 アンデレ宇田正行	2007年12月19日付	秋田聖救主教会牧師の任を解く。 大館聖パウロ教会管理牧師の任を解く。 能代キリスト教会管理牧師の任を解く。
	2007年12月20日付	主教座聖堂付とし、ナザレ修女会(東京)にて静修を命じる。但し、2008年3月末日までとする。
司祭 フランシス中山 茂	2007年12月20日付	釜石神愛教会協働を命じる。
司祭 ステパノ越山哲也	2007年12月19日付	大館聖パウロ教会協働の任を解く。
	2007年12月20日付	大館聖パウロ教会管理牧師に任命する。

九州

司祭 ヨシュア早川義也	2008年3月31日付	定年により退職する。大牟田聖マリヤ教会牧師の任を解く
司祭 デビッド・コフリン	2008年3月31日付	定年により退職する。小倉インマヌエル教会副牧師の任を解く
	2008年4月1日付	司祭マルコ柴本孝夫のもとで小倉インマヌエル教会囑託司祭として勤務することを委嘱する。(任期1年)
司祭 ビンセント原 寛	2008年3月31日付	定年により退職する。大分聖公会牧師の任を解く
	2008年4月1日付	司祭フランシス堀尾憲孝のもとで佐世保復活教会囑託司祭として勤務を委嘱する。(任期1年)
司祭 ヨハネ後藤 光	2008年3月31日付	定年により退職する。宗像聖パウロ教会及び直方キリスト教会牧師の任を解く。
	2008年4月1日付	主教ガブリエル五十嵐正司のもとで宗像聖パウロ教会囑託司祭として勤務を委嘱する。(任期1年)
司祭 フランシス堀尾憲孝	2008年3月31日付	小倉インマヌエル教会牧師及び延岡聖ステパノ教会牧師の任を解く。
	2008年4月1日付	長崎聖三一教会牧師、巖原聖ヨハネ教会牧

		師、佐世保復活教会管理牧師に任じる。(住居は長崎聖三一教会)
司祭 マルコ柴本孝夫	2008年3月31日付	戸畑聖アンデレ教会牧師及び八幡聖三一教会牧師の任を解く。
	2008年4月1日付	小倉インマヌエル教会牧師及び直方キリスト教会牧師に任じる。(住居は小倉インマヌエル教会)
司祭 バルナバ牛島幹夫	2008年3月31日付	巖原聖ヨハネ教会牧師の任を解く
	2008年4月1日付	戸畑聖アンデレ教会牧師及び八幡聖オーガスチン教会牧師に任じる。(住居は戸畑聖アンデレ教会)
司祭 キャサリン吉岡容子	2008年3月31日付	佐世保復活教会牧師及び長崎聖三一教会牧師の任を解く
	2008年4月1日付	宮崎聖三一教会牧師及び延岡聖ステパノ教会協働司祭に任じる。
司祭 ダビデ中野准之	2008年3月31日付	鹿児島復活教会牧師及び宮崎聖三一教会牧師の任を解く
	2008年4月1日付	大分聖公会牧師及び延岡聖ステパノ教会牧師に任じる
司祭 ステパノ中村 正	2008年4月1日付	鹿児島復活教会管理牧師に任じる。
司祭 ヨハネ李 浩平	2008年4月1日付	鹿児島復活教会副牧師に任じる。
司祭 テモテ山崎貞司	2008年4月1日付	大牟田聖マリヤ教会牧師に任じる。
		なお、久留米聖公会教会牧師であり、住居は久留米聖公会とする。
司祭 バルナバ壹岐裕志(退)	2008年4月1日付	司祭 パウロ濱生正直のもとで福岡ベテル教会囑託司祭として勤務することを委嘱する。 (任期1年)

緊急援助資金からの支援および受苦日 信施金の送金について

海外で発生した自然災害に関して、管区の「緊急援助資金」から以下の送金をしましたので報告致します。

8月に発生したペルー地震の被災者のために1500ポンド(約35万円)を英国に拠点を持つUSPGへ送金。USPGは災害直後自前の現地組織を活用して支援活動を開始した。

11月中旬に発生したバングラデッシュの大型サイクロンによる洪水被災者のために30万円をACT(Action by Churches Together)に

送金。

ACTはスイスに拠点のある緊急災害支援団体で、全世界ベースで自国で災害に対応出来ない諸国を支援する。ACTの資金によって現地聖公会も援助活動に加わっている。

また、本年度お預かりした受苦日信施金54.5万円はエルサレム教区へ12月初旬に送金。(教区或いは教会から管区へ送られる献金をまとめるため、毎年12月に送金しています。)

(渉外主事 八幡眞也)

Archbishop of Canterbury's Christmas Message to the Anglican Communion

カンタベリー大主教からの クリスマス・メッセージ



新約聖書の中でもっとも変わった表現でありながら、もっとも感動的な表現の箇所の一つは、ヘブライ人への手紙第11章16節の「神は彼らの神と呼ばれることを恥となしません」です。著者は神の民の歴史について語っているのです。彼らが神さまに対して忠実であり、自己満足にとどまってしまうことなく前進を続けているとき、つまり彼らが真の巡礼を続けているときには、神さまは彼らの神として知られていることに満足しておられました。この民が自らが不完全であり、まだ神さまの約束の実現への途上にあることを知っているときには、神さまはこの巡礼の民の神であることをご自身から宣言されます。私もこの10月に中東の難民キャンプを訪れました。そこでは、文字通りそして絶対的に住むべき地がないホームレスとは、そして内面的であれ外面的であれどのような力をも信じられないとは、どういことなのかを強烈に知らされます。このようなひどい状況にあっては、人々は決して満足してとどまることなく、常に将来の希望に向かっていくのです。彼らは神さまがもっとも明白に、神は共にいることを恥じない、共にいることを喜ぶと言われる民なのです。神さまはこの住むべき地を持たないホームレスと憩われるのです (at home with the homeless)。しかし同時にこのことは、神さまがホームレスや、他の色々な道でさまよっている人々とどう関わられるかを示しています。

神さまは恥じてはおられないとは、なんと妙な表現でしょう。それはあたかも、色々な事柄にもかかわらず、神さまはわれわれの仲間と見られても構わないと改めて保証されているようです。私たちのほとんどは、誰かに困惑させられる経験を持っています。子どもたちが両親に困惑させられ、両親が子どもたちに困惑させられるように。

私は時として大声で話したり奇妙な振る舞いをする誰かと道を歩いていると、私はそこにいなければよかったと思うことがあります。しかし神さまは人間である仲間が、その自己満足を捨てて前進しようとするので、困惑されることはありません。私たちは神が不完全で、混乱していて、罪深い人間という仲間を「恥と思われる」と考えるかもしれませんが、しかし神さまはその民が自らの混乱と罪深さを認識し、自分たちの真の足らなさと向き合うとき、彼らの神であることを喜ばれるのです。これは聖ルカ福音書のイエスのすばらしい譬えが何度も何度も示すことであり、特にファリサイ人と徴税人の譬えがそうです。

ですからクリスマスにおいて、神さまは私たちと共におられることを恥となさらないことを示されるのです。神さまは私たちの弱さの叫び、自己不信、不当な渴望をお聞きになり、私たちのさまよいと不安をご覧になります。そしてこの世の巡礼において私たちと共におられ、共に歩まれることを恥となさらないのです。神さまが私たちと共に歩むことに満足なさることによって、私たちはどのような仲間と共にいることを恥じているのかを問いかけるのです。私たちはいとも簡単に罪深く、疑い深く、見捨てられた仲間を恥と決め付けます。しかし神さまはそのような人々と一緒に見られることを恥じてはおられないようなのです。もしも神さまがどんな人間かのグループの神と呼ばれることを恥となさるとしたら、ヘブライ人への手紙の聖句が強く示唆するように、自分たちが旅の終点に達したと思っている人たち、自分たちが完全な状態に達したと思っている人たちに、もっとも困惑されるでしょう。(コリントの信徒への手紙1の4章8節にある聖パウロの怒りと叱責の言葉と比較してください「既に大金持ちになっており!」)。そして、何故神さまがこのよう

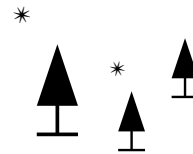
な人々の神となることを恥じられるのかは、明らかです。彼らはあたかも本当は神を必要としないかのように、本当は恵みと希望と救しを必要としないかのように振る舞い、語るのです。

神さまは自分たちの足らなさを知っている仲間を愛しておられます。そして、これがクリスマスに来られ、彼らと共に立ち、彼らと共に生き、彼らのために死に、復活された理由なのです。神さまは貧しい人々を祝福される神です。単に物質的に貧しい人々だけではなく、自己満足や自己過信の「富」を持たない人々、自分たちが人間が本来あるべき姿から遠く離れていることを十二分に知っている人々を祝福される神なのです。そして、私たちはこの祝福を貧しい人々、あらゆる意味での貧しい人々、物質的に力のない人々、飢えと貧しさを通して「心が貧しく」された人々に伝えなければなりません。私たちはどのよ

うな仲間と一緒に見られることを恥じているのかを正直に自分に問うてみましょう、そして、神がどこにおられるのかを尋ねてみましょう。もし神さまが自分たちの弱さ、貧しさを知っている人々の誤り多く壊れやすい世界を抱きしめてくださったとしたら、私たちもそのお方とそこにいなければなりません。

クリスマスにあたって、神さまが私たちにあらゆる祝福と喜びをお与えくださいますように。

ローワン・カンタベリー



『マリア - キリストにおける恵みと希望』

刊行と合同礼拝について

ローマ・カトリック教会といえば「マリア信仰（信心）」という印象が一般的にもあり、カトリック教会の聖堂に入れば十字架よりもマリア像の方が目立っていた等とも言われます。一方、聖公会にもマリア(ア)の祝日もあれば、洗礼名にこの名を持つ方は相当多いのですが、それでは聖公会にとってのマリア理解は、と聞かれればなかなか明瞭で意味のある答えはしにくいのではないでしょう。

1966年にマイケル・ラムゼー カンタベリー大主教と教皇パウロ6世の会談によって対話開始が決定され、1967年以降、2期に渡って「聖公会 - ローマ・カトリック教会国際委員会 (ARCIC)」が継続的に開催され、多くの合意声明が出されてきました。その意味では現在は両教会の対話開始40年の記念の時でもあります。こ

エキュメニズム委員会

担当主教 加藤博道(東北教区)

れまでとくに聖餐、奉仕職、権威の問題が中心となってきた中で、なぜ今、マリアなのかとやや意外に感じる方もあるかも知れません。約5年をかけた準備の上に、カンタベリー大主教の顧問委員会と、カトリック側の教皇庁キリスト教一致推進委員会および教理省、新教皇の承認を得るのに約1年を費やししながら、2005年にこの報告は公にされました。それだけマリアに関する教えと理解は両教会の歴史と信仰の中で、差異のあると思われる事柄だったのでしょう(それでもこの文書の性格はあくまで両教会・国際委員会の合意声明です)。

現代のカトリック神学は、信仰的・神学的なマリアの位置づけを、キリストの受肉、神の救いの計画の全体、教会や信仰者の群れという広い

視野から切り離すことなく、ましてキリストの中心性を曖昧にするのではなく、「信仰と愛とキリストとの完全な一致の領域において教会の象型(モデル)」として、つまり信仰者の中の第一人者として理解しようとしてきました(第2バチカン公会議等)。その意味において聖公会にとっても理解を共有する可能性が広がっています。

本書は「聖書の中のマリア」「キリスト教の伝統におけるマリア」「恵みと希望の構図におけるマリア」「教会生活におけるマリア」「結論」、および推薦の辞や序文、解説によってなっており、聖書本文からの考察はマリアを理解するためだけでなく、私たち自身の信仰の姿を振り返る機会も与えてくれます。『使徒言行録』においても聖霊降臨に至るまでの日々を、マリアは弟子たちと共にいて「心を合わせて熱心に祈って」いたのです。

「無原罪の御宿り」と「被昇天」の教義や具体的な信心の実践については理解の困難さも残

りますが、しかしこうした教義や実践がどのような起源を持ち、発展してきたのかを学ぶことが出来ます。キリスト教信仰と神学を深めていく上での貴重な文書として紹介いたします。

また2008年2月1日(金・被献日前夕)に東京カテドラル聖マリア大聖堂において「対話開始40周年」と「出版記念」を合わせて「ともに捧げる祈りの集い」が計画・準備されています。どうぞお覚えください、可能な方は是非ご参加ください。

聖公会 ローマ・カトリック教会 対話開始40周年を祝って

『マリア キリストにおける恵みと希望』出版記念

共に捧げる祈りの集い

主催：日本聖公会エキュメニズム委員会

日本カトリック司教協議会エキュメニズム部門

日時：2008年2月1日(金・被献日前夕)18時半

場所：東京カテドラル聖マリア大聖堂

司式：植松 誠 日本聖公会首座主教

岡田武夫 大司教・日本カトリック司教協議会会長

臨席：アルベルト・デ・カステッロ大司教 駐日教皇大使

記念説教：高柳俊一 上智大学名誉教授 イエズス会司祭

《新刊案内》

『マリア キリストにおける恵みと希望』

聖公会 - ローマ・カトリック教会国際委員会

聖公会 - ローマ・カトリック教会合同委員会・訳

2007年12月4日 教文館 定価(本体1,000円+税)

スリランカ聖公会女性会議に参加して

11月22日から25日、「Towards a new humanity」というテーマのもと、初めてのスリランカ聖公会女性会議がコロボで開かれることになり、日本から私と吉谷かおるさん(正義と平和委員会ジェンダープロジェクトメンバー、神戸教区女性デスク窓口)の2名が、同アジアにつながる聖公会の女性としてその課題に連帯するために参加しました。私にとっては、2005年

木川田道子(京都教区・管区女性デスク)のエキュメニカルチームでのインド洋大津波被災半年後の視察団に加わって以来2回目のスリランカ訪問です。津波災害からの復興状況もさることながら、ここ12年激化していると聞く政府(人口の7割以上を占める多数派シンハラ人への優遇政策をとってきた)と北東部を支配する分離独立派LTTE(「タミルイーラム解放の虎」、少数派タミール人の分離独立を求める最

も先鋭化したグループとの戦闘が市民生活にどう影響しているのか、ということについても気がかりでした。

ホームステイ先は今回の女性会議の全体のコーディネーター、マリーニ・デバナング司祭のお宅で、真夜中の到着にもかかわらずお連れ合いのヨハン(退職司祭)も私たちの到着を起きて待っていてください、自ら紅茶をいれて歓迎してくださいました。ヨハンもまたアジアをはじめとした世界の宗教者たちとスリランカの平和構築

を考えるNGOの代表を務められ、ご夫妻で教会や社会における平和の問題やジェンダー平等などの課題に関わっておられました。

女性会議が開かれるコロボ教区の大聖堂は市内中心部に近い広大な敷地の豊かな緑の中にあり、コンクリート打ち放しの十字架型の建物の中心に対面式の聖卓があり、その周囲を丸く取り囲んで人々が陪餐を受けにくる、という造りになっていました。これはtogetherを形にしたものなのだ、という説明で、実際陪餐の時にわ

--- 女性デスクから -----

意思決定機関における女性の比率について

聖公会という教会の一つの特徴は、主教制と同時に会議制を尊重することです。会議制というのは、各個教会で毎年選挙を行い、教会委員と教区会代議員を選び、各教区会で総会代議員を総会会期毎に選挙で選ぶという制度を持ち、それぞれの段階の会議で決まったことを最大限尊重して運営しているということです。

このような各段階の会議に参加し、運営の責任を負う人々には、どのような人物を選ぶことが望ましいのでしょうか? 「信仰が篤く、教会生活の経験が長い人、専門知識がある人、会社・団体の経営の経験がある人、知識人、良識を持つ人」などいろいろな考え方があるでしょう。もう一つの重要な要素としては、「共同体の構成員を代表する人」ということが挙げられます。 <リプリゼント>(代表する)という言葉には、その意味が含まれていると思います。女性と男性、各年齢層、「障害」者と「健常」者など、わたしたちの社会と教会を構成しているさまざまな人々が、ともに教会の現在を生き、将来を形成していくことに責任を分担するという意味があります。

さて、世界の聖公会では、男性と女性が意思決定機関において平等の数で代表されることに向けて、各管区が意識的に働きかけること

を求めています。日本聖公会総会の場合はいずれも10年以上前から、この問題が総会で議論され、議案が提出されたこともありました。最近では2004年の第55(定期)総会決議録に、各教区からの「女性の参画に関する報告」が残されています。その中から見える教区の一例としては、教会委員会のレベルでは女性の比率が40%を越えていても、教区会のレベルでは20%台となり、総会代議員のレベルでは女性が0%という場合があります。この年の総会では、女性が0という教区は11教区中6教区で、代議員44名中7名が女性(約16%)でした。

一方、2005年にニューヨークに集まった世界の聖公会の女性たちの共同声明では、あらゆる段階の意思決定機関における女性の比率を当面30%目標とし、さらに2010年には50%を達成することを求めています。その声明を同年6月の聖公会中央協議会(ACC)は承認しています。日本聖公会としてはかなり達成が困難な状況にあると感じますが、百歩の道のりも一歩から歩み始めるしかありません。女性たちが幅広い経験と機会を与えられ、それぞれに与えられた感性や意識をもって教会の大切な責任を果たしていく力を付けていくことができますように願っています。

女性に関する課題の担当者 /
山野繁子(東京)、木川田道子(大阪)

かりましたが、まさに人々は円の中心に向かってそこここから集まってくる、という感じでした。

この礼拝堂で特に印象に残ったのは礼拝堂前室に描かれている壁画です。まだ作成途上でしたが、それはカナの婚礼の場面で、登場人物はヒンズーやシンハラ、イスラムの女性などいろんな人たちが描かれていて、立場や宗教を超えてすべての人がこの聖堂に対等に招かれていることを表していました。この壁画の中にはアジア人の顔をしたイエスも描かれていますが、会議全体を通して、礼拝でのスリランカの伝統的な音階による聖歌や、女性たちがリズムやダンス、劇などで聖書のお話や自分たち自身の思いをとても生き生きと表現される場面がありました。それは私にとっても心地よいものでしたが、同時にスリランカという風土の中に生きる等身大の信仰とでもいったことを感じ、さて日本の私たちはどうだろう?と考えさせられました。

会議参加のためにスリランカ各地から集まった女性たちは約200人。パイブル・シェアリングや小人数の分かち合いの他、「教会の働きの中の女性」「女性の移住労働者（*スリランカから中東や東南アジアなどへ出稼ぎに行く人が大変多いです。）」「戦争による女性への影響」「女性とDV」「ジェンダーと暴力」「女性とエンパワメント」など10のテーマに分かれて分科会が行われました。

全体会では、「女性と暴力」ということに関わって講演があったほか、3日目の午前には南アフリカの大学でエイズ防止教育に取り組んでいるヒルダ・ベンバーさん（聖公会信徒）のワークショップがありました。ヒルダさんの具体的で明快な語り口は、先進国で唯一HIV感染者が増加している日本にも必要なアプローチだと思いました。それにしてもマリーニ・デバナダ司祭も教会の信徒向けに性教育のブックレットを書かれていて、その前書きを書かれているのはコロンボ教区のChickera主教であり、教会教育の課題の中にセクシュアリティの問題をしっかり位置づけていることに驚きました。

参加者の方々と話すうちに、LTTE支配地域の北東部にも教会があり、そこからも女性たちがこの会議に参加していることがわかってきました。来る直前の日本の新聞などでは、最近の戦闘ですでに東部は政府軍が掌握し、北部も時間の問題である、という報道であり、スリランカの全体のイメージの中では、北東部は戦争が続く寒々とした場所で、とても普通の人々が住んでいると思っていなかったのが、北部からの女性たちの参加に驚きました。確かにLTTE支配地域への連絡道路は封鎖されており、女性たちは外国から来るかのようにかなり高額チケット代で飛行機に乗ってコロンボに来ていたようですし、内戦を避けて南へ流入してくる難民も多く、北部のジャフナ大学も爆撃の合間に学生が戻って授業を続けている、という状況のようですが、それでも北部にも学校や病院があり、大勢の市民たちが生活している、ということがわかりました。また多数派に属するシンハラの人たちにしても、テロは許さないが、少数派を力づくで封じ込めようとする政府の今のやり方も支持していないように見えました。しかし和解に向けた対話はまったく進んでおらず、私の参加した分科会でもどうすればこの状況を変えられるだろうという話し合いが行われました。

私は、外国人の立場から、多数派の視点からの報道をそのまま受け取ることで現地の状況や人々の暮らし、考えに対して思いにみを持った今回の経験を話し、そのことが誰と、どのようにこの問題を考えるべきかの選択を誤らせることがある、だから困難でもこうやって女性や普通の市民たちが直接出会い、一緒に考えようとするのは大切だと思う、と話しました。それにしても、普通の女性たちが砲撃戦の中を飛行機に乗って北部からコロンボまでやってくる、ということだけでもどれだけ勇気がいったことでしょうか！

さて、この国では主にシンハラ語、タミール語、英語という複数の言葉が使われていますが、驚いたことに簡素な教区会議場にも、同時通訳システムが備えられ、ブースの中の通訳担

当者ら～男性でしたが～が同時通訳する声が一一人の椅子に備え付けられたヘッドホンから選択した言語で聞こえる仕組みになっていました。また今回の礼拝式文も3種類の言語で併記されていました。この国では、言語と文化が違うお互いを理解するためにずっと具体的な工夫と努力が続けられてきたことを思いました。

プログラムの合間に、今回残念ながら訪ねることができなかったNGO、TECHJapan(昨年日本聖公会がその働きを支えるために献金を送っています。)の代表でジャーナリストのスベンドリニ・カクチさんと話すことができました。現在、北部の中でも南よりのバブニヤという所に裁縫トレーニングセンターをつくり、縫製の技術を女性たちに身につけてもらう取り組みをしておられます。彼女は「できた製品は勇気ある女性たちの証なのです。」と語ります。戦闘地域のただ中で女性たちが自立に向け、自信を回復していくための援助を地道に続けるスベンドリニさんの「there is a will, there is a way」という言葉が心に残りました。

会議のテーマはTowards a new humanity。開会礼拝の中で行われた寸劇は、女性への暴力やハラスメントを巡る場面と、イエスの宣教の旅に共について行こうとする女性と男性弟子の会話のやりとりの場面でした。イエスは、男性、女性すべての人の対等な「パートナーシップ」を呼びかけます。それまで当然のように持っていた意識の枠からはずれることに、恐れがあるかも知れないけれど、そのことで新たな関係を築き、自分自身も変えられていく希望がある、と劇を見ながら思いました。

会議ではマリーニの他にも3人の女性の司祭とお会いした他、男性の司祭さんも多くはいたのですが何人か出席されて女性会議をサポートしておられました。今回、管区からの派遣枠は1名でしたが、女性デスクにいただいている献金とカンパによって私たち2名が参加することができました。貴重な機会を皆さまより与えていただいたことに感謝いたします。



パキスタン北部地震復興活動その後

管区事務所渉外主事 八幡真也

2005年10月8日の地震により大きな被害を受けたパキスタン山岳地域のパテカ地区の復興活動は着々と実績が出ているようです。聖路加国際病院の医療支援グループと一緒に活動をしたパキスタン聖公会・ペシャワール教区からは、毎月報告書が送られています。彼らが実施している復興活動が軌道に乗ってきたことがわかります。その報告書をもとにこれまでの活動の成果を報告します。

私たちが医療支援活動をした場所であるショワールやパテカ地区は地震によりほとんどの建物が全壊した。聖路加国際病院の医療支援グループは2005年11月末から12月初旬、およ

び2006年2月から3月の期間約5週間支援活動を行った。

ペシャワール教区はこの医療支援と平行してパテカ地域の住民約400世帯の復興に対して全面的に支援することを決め、現地住民と共同で地震直後から支援活動を開始し、現在も継続している。

全壊した家屋の建設が第一優先で、そのために必要な資材の無償提供を行い、労働力の手配が出来たところから再建が着手された。自力で着手できない場合(老人や母子家庭など)は教区と現地の住民が協力して、現地の労働力を出来るだけ活用して家屋を建設した。この結果建屋が再建され、労働市場が生まれ、住民にとっては非常に好都合であった。

上下水道設備は地震以前は必ずしも全戸に完備してはいなかったが、この機会を利用して

全戸に整備した。したがって住民の生活はこの観点ではかなり改善したと思われる。

医療支援活動を行った旧テント村があったショワール地区には複数の建物で構成された立派な診療所が完成し、パテカ地区にあるサテライト診療所や移動診療活動の中心的存在になっている。

パテカ地区に関してはサテライト診療所、学校、職業訓練所(主に裁縫センター)などが完成し、とても活発に利用されている。裁縫センターは訓練を受けた住民が現金収入を増やす事に役立つものと思われる。また住民の日常生活を助けるためにこれまでに水牛や乳牛を60頭、鶏300羽、小麦の種、オレンジの苗木など

を住民に提供した。

建物の復興が徐々に進み、住民の生活は元に戻りつつあると思われます。ペシャワール教区では長期的な視野で復興活動支援を続けています。

なお、復興に関する現地の報告書に関心のある方は管区事務所渉外主事までご連絡頂ければ、報告書を転送致します。



パテカ地区の完成した中等・高等学校の建物

ショワール地区に完成した診療所。円屋根のある建物がその一部です。



Merry Christmas and a Happy New Year!